清涼飲料水

金屋中・3　佐藤　知世

「もうこんな時期か…」
部活に行く足どりが重い
歩くたびに出るため息
「おはよう」
後輩に笑顔であいさつ
でも私の心は決して笑っていなかった

「今年の曲はスプリングフィールドだ」
実際に部員のみんなで聴く
キラキラとしたメロディー
特徴ある低音パート
清涼飲料水のような爽やかな曲だった
しかし
私には不安という濁った水が流れていた

練習が始まった
不安は的中した
顧問が鬼モードになった
私も後輩もみんな
厳しい意見を浴びるばかり
つらい
率直にそう思った
しかし　私は気づいていない
さらなる「つらい」が待ち受けていることを

「一年生の中でオーディションをするぞ」
「二・三年生とコンクールに出場するんだ」
え？

「知世に教えてもらいながらがんばってね」
顧問が一瞬鬼に見えた

一年生との練習が始まった
手取り足取り
何から何まで
全て教えないといけない
お母さんってこんな感じなの？
しかし、和気あいあいと練習する一年生
天使に見えた
そういえば私も……

入部したころは
全てが楽しくてしかたがなかった
アイドルオタクかのように
楽器も部活も大好きだった
あんなころもあったな……
私に流れる濁った水が
清涼飲料水に近づいた気がした

鼓動が速く大きすぎる
部員に聞こえてしまいそう
いろんな感情が押し寄せた日々だったけれど
目指すは金賞

もちろん金賞
最後のコンクール
「金」がほしい

私は舞台裏と同じくらい
暗い気分だった
他校の演奏が聴こえてくる
不安が大きく私を覆ってしまいそう

でも大丈夫　自分を信じよう

照明がまぶしい
演奏は楽しい！
本番はあっという間だったけれど
もう鬼ではない顧問と私と部員
最高に爽やかな演奏だった

結果発表は「銀賞」だった
悔しさが胸から込みあがる

でも
私にはもう濁った水は流れていない
それは
ひたすら練習することの楽しさを
物語っていて
よい思い出になっている
証拠だから